2

連載エッセイ

森を創る

石川 幹子
いしかわ みきこ
東京大学大学院工学系研究科 教授

手元に、一冊の古びた本がある。『原色植物検索図鑑』（北隆館）で、初めて植物を学ぶ中学生や高校生用に、わかりやすく書かれた本である。あらためて、初版の発行日をみると昭和37年とある。小さな緑色の表紙の図鑑は、私が東北地方の小さな街で、野山の植物を調べはじめた時に購入したもので、爾来、いつも本箱の片隅にひっそりと佇んでいる。子供の文字で、検索した日時や、場所が書き込んであり、往時の故郷の豊かな自然が甦ってくる。

1960年代の里山には、長い農耕社会が営々として紡いできた、人と自然の豊かな関係が存在した。薪炭林として暮らしに不可欠であった雑木林は、数十年ごとの間伐・更新と、日常的手入れにより持続的に維持されていた。早春には、明るい林床は、一面、薄紫色のカタクリの饗宴となり、道端の陽だまりには、タチツボスミレが、こぼれる様に咲いた。陽だまりの刈跡の草原には、ビロード色のオキナグサが、一斉に芽生え、やがて、その名のように翁のひげを髪髭とさせる羽毛となり、空高く、消えていった。

植物に心ひかれるようになり、誰もが、出会うのが、牧野富太郎である。学名の最後につけられている牧野の名前は、その圧倒的量により、子供心にも、一体どのような人であったのかと興味は尽きないものがあった。小学校中退でありながら、日本の植物学の基礎を築いたというエピソードは、学術研究の豊かで、自由な領域を予感させるものであった。牧野は、1862年（文久2年）、土佐、高知に生まれ、19歳の時に植物学の勉強のために上京をする。当時は、海路であり神戸港に立ち寄るのであるが、そのとき、牧野は、六甲山の山並みをみて、その驚きを、次のように記している。

「高知から蒸気船に乗って海路神戸へ向かった。（中略）私は瀬戸内海の海上から六甲山の禿山を見てびっくりした。はじめは雪が積もっているのかと思った。土佐の山に禿山などは一つもないからであった。」（『牧野富太郎選集Ⅰ』）

写真-1は、明治中期の六甲の山並みである。なるほど、すさまじいまでの禿

写真-1 六甲山（明治中期ごろ）　出典：『街のしあわせをまもって50年』六甲砂防50年記念誌、国土交通省六甲砂防事務所

写真-2 現在の六甲山　写真提供：国土交通省六甲砂防事務所

写真-3 中国四川省汶川（2008年12月）

写真-4 中国四川省汶川（2008年12月）

山である。江戸以来の薪炭林としての過度の利用が、森の回復が不可能なまでに進んでしまっていたことを如実に物語っている。森の喪失は、土砂災害を多発させることとなり、昭和13年におこった阪神大水害は、死者695人、被災家屋15万戸の未曾有の大災害となった。谷崎潤一郎は、『細雪』の中で、自身が体験した豪雨について、つぎのように述べている。

「此処から省線の本山駅あたりまでは、出水はそれ程ではなく、線路の上を伝わって行けば水に漬からずに行けるけれども、あれから先は、西へ行くほど一面に茫々たる濁流の海で、山の方から大きな波が逆捲きつつ折り重なって押し寄せて来て、いろいろな物を下流へ押し流している、人が畳の上に乗ったり木の枝に掴まったりして助けを呼びながら流されていくけれども、どうすることもできない有様だ。」

阪神大水害を契機とし、六甲山系には直轄砂防事業が展開されるようになった。写真-2は、現在の六甲山である。わずか半世紀で、このような森が創り出されたことを知ったのは大学時代である。「砂防」すなわち「森を創る」ことであるという基本に、深い感銘を覚えた。六甲の山には、砂防にかけた並々ならぬ努力と創意工夫の歴史が凝集されている。1995年におこった阪神淡路大地震では、山麓における土砂崩壊は起こったが、森の存在により、その規模は、最小限に抑えられた。また、被災後、速やかに立ち上がった山麓グリーンベルト構想により、六甲の山並みは、再び、守られることになった。

写真-3は、中国四川省でおこった大地震の被災地の惨状である。行けども、行けども、果てしなく、山並みの崩壊が続いている。写真-4は、地震後、追い討ちをかけるように発生した土石流により、埋もれたまちである。
復興は、全く進んでいない。
人智を越える災害であったとしても、100年の計は、必要である。多くの災害を教訓として、築き上げられてきた日本の砂防の智慧を活かし、森を創り出す思想が、遥かな四川省に甦ることを、心から願うものである。

経済活性化のみに視線が注がれる、軽薄な社会的潮流の中で、「山を治める」という土台が、究極の時に人命と社会全体を支える資産となることを説くことは、時に、困難を極める。しかしながら、ここに掲げた二枚の六甲山の写真は、歴史の証人として、物言わぬ大きな力となると考える。

★参考文献
- 『日本砂防史』全国治水砂防協会
- 『六甲三十年史』六甲砂防事務所

イラスト：仲野順子